古今文鑑

六之七

911.3
ホ
6-7

序跋類

其六付表序　表忠万句序　一居序　觀音愛染座序

三条合序　千句跋　晴鴉集跋

對向類

花鳥對　影法師對

真如堂

其儀序

[illegible]て天の徒あ[illegible]
おもてとをいふ母の称あ[illegible]
追われておもてをいふおこそ[illegible]
て唐あ[illegible]徒のいもいもと[illegible]
い[illegible]捕のなをいふ[illegible]あ[illegible]
やまぢあらゝを獵ていぢ[illegible]
み和とへ[illegible]訛めく[illegible]
う裏ていり[illegible]今の徒い[illegible]

やおどろく為雷恐ぢ徒ぢとかみなりをおそるゝ[illegible]
むかし雷と書ぢ[illegible]ものゝ[illegible]
いふなるをいふ[illegible]
稲つまかみてとゝ[illegible]
風雷をいふ[illegible]

犯云此序ハ此ニシテ賦ノ体ヨリ去レ、依徒ノニオラムシテ
俗諺ノ多ク格ヲ成セルヨリ和漢ニ幾許ノ徒ヲ云ヘル誠ニ
詩ヲ連俚ノミオラシヤ徒語ハ秘蔵ノニオフ置テ女閑ト
風雪ヲリ大笑ノ虚言ヲ伴ニテ武城ニ其面
稲トノ虚誕ナル例ニ文章ノ虚実ヲ伴ニテ武城ニ其面
風雪ヲリ大笑ノ常語ナルヲヤ

東山一カ句序　心平堂

卜居序

家を近衛油小路に二条堀川にて端午にあたるよし聞きつゝ
とこゝかしこもあたらしくあるよし物語をせしとてあるじの
あのゆかくるこゝろを自己の智能とまゝにて大なる時
いよ〳〵よろこびあるじんとするとて終に乗馬と
負ひあるじ敲鍋とそこ〳〵に油筒とおわりて遠の山
罪人おもてはたのかまつさあり山雀を甑の中
にのこすとそれ前の人々座の内に乾坤とまゝにむ
仕を他人と造作をそれてなの世とそこ〳〵

巻第二

住を深れの害あり湖南に和と深法にて名を老西
和よ庵とそれ〳〵庵をそこ〳〵時に盤よとひよあるに時に
世の人は造作こゝろの多き智能とまゝ生活んら
人生尾とそこ〳〵むまゝにて実の和よ庵とそこ〳〵
冬牡丹の一事とひ〳〵て私んとそこ〳〵
狂云此序八筆頭三カアリラ称揚有在ノ文章ト称スレ
悉ク自己ノ智能ヲ他人ノ造作ヲ誠メテ中間理屈
ノ修行有ノ形容セル陳倫ノ身ヲ置ニ於テ

ノ指示ト云ヒ誠ニ此老ハ故翁ノ風雅ヲ継ヒテ十里ノ陳臺ニ明ル
ノ知リ人ト成セルカ云ヒモ我仲ノ同指人(ナカマウト)ナレハ姓ハ生駒ト云ヒテ
自ラ白駒居士ト称ス但シ其此ノ名ハ白ヨリモ云ヒ

観音遥ニ座ニ帯

東若竹

ヒテそこ此所の観世音ヒむ一花山院の法ヒ皇ヒ法ヒ
ヒりせしこみの名ヒ呼ヒテそと西国巡礼ヒ
ありし始ヒ那智の滝ヒ頑なヒ世ヒの客ヒとヒちう
ヒテヒ客汲の水ヒ妙覚星ヒ月ヒ
向ヒ云ヒ一句ヒ吹ヒ行ヒ
ヒれヒ一ヒヒありうヒ云ヒ

云ヒてふうヒ一ヒヒて感ヒれヒ客ヒ應ヒうヒて
ヒれヒそヒと万水一月ヒ云ヒ
ヒとヒう月ヒ場ヒヒふヒ
捌ヒ行感ヒ昭ヒ
ヒ面ヒ一面ヒ馬観軍ヒ
ヒ念彼のヒうヒとヒう一如ヒ
おもヒうヒれふや客ヒ
ふヒうヒヒヒ
ヒヒて郭正のヒう
ヒヒれふや権實のヒう

くるまで此一句なるべし或は至心の
至心を名よのかくらとなりて在よの衆生てこそ
ひとを除く歓喜在菩薩と名付国通大士と名付
なりけり安楽世界をしめす
まり頭人ともに不信不敬の人とて逃るを往
ばくもおそる〳〵さを大士の実験ありければ此の中州
石動の歓喜寺いにしへより大悲の実場なる事顕れ
ことと造立てむせれ而よかてやうやく
婦女の遠境の労とそをむる人ちふ願寺孤獨の
貧窮の悩こもあるんなれば諸国の老を一堂に
ひ一念にくまよ十こ念の掌と合をて深く去北不退の
地ぬかほこと〳〵ふ事
北信序ハ文章ノ雲地ナトラ其名ラ配ルニ三昧法ノトキ
ニ去ハ歓喜ノ安楽ラ領ニ玉ハム毛摺蔵ノ所説ニメ其集
ノ詞ヲ論経ラ摘抹セリ今ノ石動ノ歓喜寺ハ弘住ノ僧ノ
風雅ヨリニキニ尊仏ラ奉納ニテ其ニ北序ラ乞ケルトラ四ニ
今ノ石動ハ倶利迦羅ノ山ノ麓ナリ

蓮二序

第合序

むく一善の例ひろむるを善とをまるハ世こよれるて

おの雛むらく〳〵おとされ南山とのつゝまれにつく
そより人向のなし藤よりて杜毋とやう〳〵苔ふと
あつてきれにおもの義とあるよう和漢人性の
ひれふる一ひらて詩句の三百余首ふこ事とそれ
をとゝ先うれとふ客のちうよとゝふおよ活人そもむ活逃
あつて言人、そ事のちうよとゝふおよ活人そもむ活逃
そもふよなりけおそのうよふこ事ふつゝきの
なの姿ふつとやちうと変これの所ゝやうに東漢よ
けむととてあをひてふ離金墻の事とゝひ事
和締のれとおちふよの價ゝ杜毋よあつをひて一いつと

の業杜とひうえひれふ事ひ価のよそれうよ
事一ふ沈濃の色とそふ〳〵甲ふそ毫事のすと
あをふ大ふつはそ人ふ見ひて事ふ第ふて
ふおちおそ〳〵むうふ
銀鏡
銀鏡ふのふとおそ小金あふの価をふ価
のあれえひれうふとゝのものをふう
表杵号とひ金鳥銀風のれ
をおてむ一のちうは
ひ一歌おて中くふれ
村雨を変水のまふひ

れ北至るといふあたり或は何某ほあて
のあとふ〳〵しき石通ちもの酔とちて迄人鍬たれ生
よてふたつのひねの茎とあるれにて又ときと〳〵
きたむしもたらし〳〵なきる石あん〳〵ほれとと年の去年
えやうさんたへのちひりをくひうとあてまうよ代
のさらしををたりしまれ

北云北岸ハ越ノ仰角ノ住ヲ三茎ナリレヲレ連ニ
下田各ヒリ去レハ北篇ハ知ニノニヲヨリ起リテ人間ノ負福ニ
喩ヘルカ絶ニ花影ノ棚モヨリ朱門ヒノ富豪ニ結ス
ヒリ或ハ膾鱗ノ名ヲ以テ園々ノ花ノ仕舞ヲ云ヒ絶ヲ

ノニヲハ神アリト称スヘシ或ハ左ニ座廻鳥アリ右ニ吐茎座亀リ
トスイテ朱雀門ノ下ニヲ茎ヲ置クル是ヲ錯辞ノ文法
ニレテ禁門ノ名ノ猶書ニモ紛レサラン然ルヲ絡語ニモ人ノ要
ヲ忘レヌニ茎ニハ当時ヲ祝レタル亭中ノ保衣ヒハ文外ニ知シ

荒木田守武

千句跋

ちて能諧ことみてりみ笑いまひとはりいうも
ヒ宝とたてのへ風原ヲ百をしくはて
くあんやうと芸れ好ヨめをり〳〵ありひよるそれ
そそちよとそくみそ

帰鴉往来路

一巻に閻如老人の老をわくるよすがなりけり
序文 帰鴉のこころとは
つくる人をたのしの心のみの
のもしろそそるの秋冬
ら年の名に言にそこ
これものかれかりる
もそそくれのもれそ

秋を初秋の心はやうに
まつる魂まつり二おのあ
れの帰てまるこう帰
廉もおくも秋のそ
秋月の花とまれやそ
姫ひきのもあるまり
そもれ利のそ
むの人よきおあ
の雲のなとそ
るそれ燈籠の此の

ありてこゝぬさとへてさせしさかつられがうかびなるのまへよ
まかんとするりて誠よ幸くの花をこふへし

評云此段ノ専用ハ四季ノ名目ヲ配ルニ妙アリ誹諧ノ
文法ハ此選ニモ数多ナカラ何レモ一体ノ差別アリテ其筆ヲ
文鑑ノ文鑑トシルヘシ先ハヤ四序ニ年忘ノ二字ヲ置テ
春ニハ今年ノ花ト云イ夏ニハ昔ノ花ト云イテ秋ニハ花ヲ
忘ルト云ヘル哀花ノ歎ハ此所ニ至テ前ノ意趣ニ見ヨト云ヘリ
冬ニハ焼火ノ更ナルニ泪ノ句ノ妙絶花ノ縁語ノ対ノ親切なる況ヤ
春待ノ二字ヲ以テ年々ノ花トスイナヤル七縦八横ノ自在
ヲ称スヘシ但シ此花ハ濃ノ二輪山ニ住ス先師ト所縁ノ桑ツナリ

問類

花鳥對　東華坊

儒家の流ハ世ニ天地あり陰陽あり男ありて女ありて君臣ハ
義のおもむきによりて父子ハ恩のあはれによりて夫婦ハ情の
ねむごろによりて其ちかひを行ふとやらむ此それに依
れるよのいひならはしも禅宗のむかしをもなをさりしも
詩ではやまとうたにはそしりていさんとするに依
よくあよふうたにはいのちとあがりてくるしいなくそれ
きりしさまはどこと中ゐのあとしるやうれしさ鳴まの
花鳥まねはまろれはうとありて神のむなに問ふるの教を

[illegible]ことなり
きぶて初のおにれの止遍ハ
ルそ有そも姫のえ
くや上路(アゲロ)の山姥し
やうそて[illegible]
仍云此類ハ宋玉カ對向ヨリ傳ニハ理平廣業ナト
鳥獣松竹ノ對ニ效ヒテ先ハ花鳥ニすう題セル本朝
風雅ノ的面ニシテ先向イ先對フキ物ナレヤ但シ對向
文法ハ理論ヲ後ニシテ文章ヲ先ニセル委曲ハ前卷ノ題註ニ
在リテ左モ設論ノ虚實ヲ知ルヘシ

夫レ六向有ハ天地陽ヨリ君臣父子ノ五倫ヲ人ノ其ノ詩者
連郷ニ花鳥ノ姿情ヲ論レタルカ或ハ花モ盛ナル前ノ物語
ノ詞ヲ借ワテ花ニ今宵ハ古ヲノ志ヲ取リ或ハ秋花鳥
ニ冬ノ花鳥ト云ヘキ今ノ啼ト咲ト二歌雪ヲ見法ノ向在ノ
又ハ[illegible]或ハ菊ニ啼ト住吉ノ妻ノ詞ナカラ世ノ耳ナレ
花鳥ト云ヘナレ殊ニ秋冬ヲ錯綜レテ云ニ向讀用ヲモ
知ヘレ或ハ詩人ニ準ヘ咲ト江南一枝ノ梅ヲ借テ一鳥不鳴雪
滿(ツ)山ニト云ヘル古詩ノ詞ヲ取合セ又ハ花ト鳥ヲ指ニ富セテ
是ヲ一時ノ働ト云ヘレ但シ我家ノ花鳥(えとり)ト外鶚(ほとゝぎす)ヲ冬季ナセル
[illegible]ニ新式ノ條ナリ或ハ三人ニ準覚ト云ハ兼名ノ歌ニ寄

セテ千鳥ニ花ノナキヲ又ラ云ヘリ或ハ況ンヤ筆林ト八對句ノ
博達ニ喻ヘテ向者ノ心ノ如ラ論セコトヨリ
去レハ對句ハ君父ノ二字ヨリ晶ケ明カノ五倫ニ至ル迄ノ
花鳥ラ論セス先ハ情ノ花鳥ラ表スヨリ詳ニ述ル迄ニハ
染情ノ先後ラ知レトヨリ或ハ雎鳩鳩頭ハ和漢ニ詩ニ
又ハ雲鳥抔ラ詩ニ用ヒ鴛鴦ノ故ヲ又ハ別々
去レトハ雲ノ佐ニ雲ハ夫婦同居ノ混ヤヒ鴛鴦ノ名又ニ取合
セタル又ハ字ノ自在ラ称スヘク又章ノ博達ニ鷺ヘレ或ハ
詩花ニ鳥鳥トハ漢又ニハ詩ニ歌花滿地ト云ヘ漢ニハ
訪陽每朝来ヘ啼テ和漢ノ花鳥ニ和漢ノ詩ニ立合ス

詩作ヘハ雲ヘノ結又ナルラ見ル(レ或ハ兄弟ノ花鳥ハ屬託ニ
例諧ノ業格ラ用ヒ或ハ朋友ノ花鳥ハ實地ニ方言ノ語
脈ラ時ス左モ一樹ノ働ヨリ例ニ雁雨ノ如用ラ知ル(レ
或ハ梅ニ鶯カヘハ對句ノ詞ナレハ此ヨヲ傳リテハ讀
(カラス或ハ立方野モ羽坂モ總ラ古ノ詞ヘヘラ芳郭ハ
花ノニヨラスイ達坂ハ鳥ノ子ラ云ヘル是ラ陪見ノ法ヘ云
次ニ春ヒヘノニヨヘハ忠峯ヘ云ヨリ杜詩ノ春寒ヒ氷雪ラ
含メテ鶯花ノニヨヘ時節ラ云ヘル例ニ和漢ノ博開リ或ハ
春モ寂寞ヘハ重々宴ノ詩ノ蜀魄ヨリ和漢ノ節ヒ遠
ラスイテ雲ヒ雲ヘハ知花ノスイヘケヘラヨ里ヘハ蜀帝ノ怨

ニ恵ルヲ云ヘリ或ハ御ヨニ杜冊ノ續キハ杜冊モ春賞ノ遊同
アレハ和漢ノ論ノ序ヲ倩ツテ天空ノ花鳥ヲモ云イテモ
但シ詩ト云イ鎖ト云イテ一年一月ノ意ヲ對ヒル杜冊ノ
上ノ名語ニシテ況ヤ花實ノ筆法ヲヤ然ハヲ連ミクケテ歌路駝ノ詩ヲ含ム
ト云イ御陵ノ花ノ連ミクケテ歌路駝ノ詩ヲ含ム
總テハ花鳥ノ緑語ヨリ總テハ其名ヲ文章ニ配ヒル總テ
語路ノ新續アル一ヲ言ノ粉骨ヲ称スヘシ或ハ樽ニ對ヒ
ト雖ニ紅葉ノ一對ハ先ハ倒將ノ格ナカラノ全ク意對
ノ奇絶ニシテ景濃モ冊ヒロ本ヲ參ノメテ倭文ニ比ヒ
法格アリト信スヘシ然レハ浪世又無衛ハ大津繪ノ文相

御野古法眼ハ教色繪ノ先達トスイナヒリ或ハ様ニ風ハ
広ニ和漢ノ剛柔ヲ對シテ中向志ノ花鳥ヲ結語ヒル能筆
ニ文章ノ持ヲ知ヘシ或ハ物ニ好雲ハ陸ニ一句ノ論ヲ設ケ
内ニハ連ヶノ景弱ヲ云イ外ニハ能語ノ格ヲ云ヘル杯鶏
豆ニ鳩モ例ニ能語ノ筆格ハカラ一句ノ模様ノ短詩ヲ云
或ハ雪業ニ龍ハ信長ヨリ花鳥ノ用アルヨリ汀
ニ雀ノ無為ナラシニハトヲ云ニ世法ノカヲ倩ヘル誠ニ文章屋
ナカラニハ或ハ竹ニ雪ノ花ヨリ松ニ竹ノ緒ハイナヒル何モ詩
ノ詞ヲ借テ冬ノ花鳥ノ風情ヲ附ヘル能筆ハ画心所最ト云ヘル
或ハ亂ニ舞花ハ春ヲ待ツテ云ヘル結局生後ノ行宿ニ春ヲ待ツテ

花鳥ナレバ本ヨリ正月ノ祝詞ヲ添ヘテ亂ヲ撫カ君ト云ヨリ花一字ハ折節ノ風流ナラシメシハ對向ノ結語ニハ古人モ多ク祝語ヲ用イテ當代ノ万歳ヲ云ヒケレハ爰ニ山姥モ浦人モ總テ君ガ恵ミニナツイテ心ノ花鳥ニ和キタル花實ノ所在ノ結文ト云ヘシ但此篇ハ假名ト眞名トニ合併シテ師ノ庵ノ遺稿ニ留ムレド今ハ眞名字ヲ加フルニ及ハス讀者ハ宜モ通用ヲ諳ンスヘシ

影法師對

櫻木岡

其の舊き鏡の中より出るあり誰々何や忽然と来てその声四方皆と応ふて之を

と問ふて汝何人なれば我々が白櫻下に来りて我と對して座するや彼曰我は白影と謂ふて汝を問ふに汝何人なれば我々が白櫻下に来りて我と對して座するや我曰我はこの七度まで来りしなれば昔より我は白櫻下にこそ何で我々が白櫻下にこそあるや彼曰我はこのもの七夜までも来りて昔より我は白櫻下のこそ何で我々が白櫻下にこそあるや我曰我は我が笑ふに笑ひて我が泣くに泣く僕の常隨にして僕の影なり我が衣の色あり我が影の形あり左邑ありて右邑ありと謂ふて我に倫みて

きり対さく我んと書て巴一編と勝おうてきて
とうるやもの子訪と
あくセそうまてやつて
もてゆまくの寝
えれや一の往そのの
往ム北堂侖ハ伯櫻下ニ誌ニ毫ノ模様ニレノ如ニ年尾ノ向ヲ
続ク三元ロノ向ルヨリ仍名ハ是ヲ西文招ト題セル誠ニ傳文
ノ一格ルラ今ハ歪ニテ對向ニ卯ヲ去レハ包堅ノ對論
亜在郎ノ言語ラ爭ヒテ巴ノ左右ニ次斷セル鏡ノ影ノ差別ハ
今明ヨリ去ルハ淺文ノ設論ニ毛暖レテ一笠侖ニ十七八箇ノ彼我

ニヲラ墨ムなモ曲折深遠ノ所ルレ況ヤ泡影ノ論ヲ雖テ
結文ハ我ト我心ヲ書ク多ルル急ニ笑中ノ刀ヲ用イテ文ヲ屠要
ノ自在ヲリト称スレ但レ仍名ハ濃西ノ大垣ニ産ニテ活ス
隠士ヨリ白櫻下ノ二まハ今下ノ称号ナリト

辭類

居眠辭　桃化辭　仰兎辭　自得辭　栖長者辭

巴弓兎技辭　招魂辭

說類

塾上人說　名ヲ指ニ主一說　櫻島人說　名ノ說

名ヲ二子一說　論ス佛ノ說ヲ一說　座語說　辻談義說

頌類

蕭寺地頌　不戀赤頌

松葺頌　猶德頌

雑類

居眠雑

世ごろなまけむの北枝へ手紙をつかはしけるに
なをむかふて眠るもあるを用ゐて受けもあるを
眠らぐことても眠るものの色狐を毒ぐ物と伝へ
俗ごと眠るもなるごとくつらつら北枝と称の通
称ともなれむ時を経る用あるてむてあるてなりて
の称むる時を経る用あるてむてあるてなりて
世情のごとくなく称あるべき物業の
称かりてあてやらごと学者のおもろと称むけあるとぶべ

なごとくつらつら北枝と称の通
称ともなれむ時を経る用あるてむてあるてなりて
の称むる時を経る用あるてむてあるてなりて
世情のごとくなく称あるべき物業の
学庶の中ごと有ものおよあらて山家の鴉へ
ばそ俗をとふいうごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通
ごとも用あるごとくつらつら北枝と称の通

文おいて信ずんと全体のくさぐさ
辨かありて唐へしたうかへむとも
仍云此辨ハ婉孌ニシテ然モ万折明白ナリ玉水紆徐ノ對ニ
俳諧ノ詞ヲ云シ蜂頭蠆尾ノ對ニ儒者ノ賜ヲ捜ヒル一ツ伊ノ
趣意ハ此句ニ知ル(レ)シ況ヤ児ト云ク雪隠ト云ク帚ト
子陵ト云(ル)此等ハ文章ノ皮毛仏辨ヲ傳ン
例ニ虚空ノ文證ト云ハン誠ニ人ハ佛語迄テ文ニ和ラ
ノ通云アリト雖ス(レ)但シ於辛垂ハ別在ヌ趙ヨハ彼カ樣ニ
なり

桃化辨

蓬ニ唐

つらつら按ずるに人のあるをおのれありとし
おのれの善をもつて人のあるをおのれなしとし
ありとなしとを雖とも其の善悪ハ人ありてなし
これさらのつひふんを辨ずるにあらず
潜号を仮りもつにおよばず
仏おとわれありとしてあるいはそれを石文の陽れあんむが
西を西う桃そよ年ごみのり今の蓬ニ唐う辨ニ日
ごむ仏ふそ桃のごとくんを仏ふ
化のごとくそこに故院のおまう行とそよ志ふ仏父の
恩ふ蔵ニて永く無ひと忘れんふそ

行云雜ハ其ノ容情ヲ寓シテむも雜ノ体尽ク此ニ
此公ハ都ノ瑞泉寺ニ住シテ故院浪化公ノ風流ヲ継ト芭蕉
門ノ風雅ヲ慕イ給ヘハこまニ桃青ノ桃ヲ橘テ浪化ノ
化字ヲ挿レルトソ然レハ王母カ桃ノ實ニ蓬ニヲ雜ノ花
ヲ對セル誠ニ一ノ論ノ寄絶ニシテ不忘ノニまハ曾節ト
見ルレ但シ井波ハ其ノ郷ノ名ナリ

伯兎雜

東花坊

越カ天下ニヲヲキ石門ノ七ヲ一ノ花坊ノ
さんとそるゝ江岡の眺望ヲ一通ヲ乞テ其ノ
侭とゆるゝんいそ主人の重寄ニ依ヲ
今の心ヲ一のこれをそれいそ伯兎のことひて
たゝゝゝめくあゝゝゝ一枝ヲ一俊名の扇と
倍の雛ヲ林ヲ倍養とヲ行て世のこゝろ
心もおとかく一代俗のこゝろ人ヲ詞ヲ
今ゝゝゝ人ヲ詞ヲ
あゝゝむ一秋迎ヲ行の
ゆをヲ一へ行ル一ヲの世ヲ廉兎のちゝあゝとを
もゝゝ一ゝ人ありて最後の行人ヲ
三世のちゝゝゝ

ふうきらひてゆのまい通称して今之を称す
あるに付そのもうとするところをとるてそうするのとも
ゑ体よく内祝のよう連立智能の向よりあうてれたに
称ふとをれ仕んいもをうらのうちさく一事也
役所辞捷隆ニシテ人ヲ論ユルニ文アリト云ヘレ共ハ唐朱周緑
ハ遺教経ノ趣向ニメ甚ク人ヲ所人ニ論ユル最後ニ至ニ好辞
ナラン況ヤ先ヲヲ辞明シテ彼カ上下ニ五ク実ヒメル例ニ倣諸
業務ヨリ重宮ハ一ヶ条ノ教ニ急ヨリ但シ天下村ハ福愛雪
自得辞
北七望

ひくく世界のわ美とそうふうな豚ま番あれく答うる
あおおくは月ま骨ふおも買人ま世ひそ
河豚ま番ふくハ龍宮の制れまのそれて此男ふ
うそもやくひりとて海月ま骨あく恋等稚も
かふてよまうし物ニ元のも減まて得失當分
そいうんゆりやひてた緊存あれい牙ふく九ふあれ
寛ひう月のあうれ恋ま此のおのれとうむ
世ま出て元用まあふへまおのおまそ称うそ
お論の布ふそうそうふ美恋ふれて美恋とうれ
れれこと称うへまおうへ

よりあしよりやぶれかぶれといふむるは隠遁の人の癖なるべし
せよあるべきを笑ふべきにあらずつさ書物のごとく貪乏
果報の国にうまれても得るもあるひはもあるにとれは
飯汁に明月とかくへ気乳の志に酔ひをて一盃一酔
の服が滅して雨花の芳しの病がなる時は月に花もかりし
くもに鼻もおもしろく雨に何ごともおもしろくまたみの
もおもしろく春のけしきも秋の夕ぐれもおもしろく
くみもおもしろく花もおもしろく雪もおもしろく得
自得のおもしろさあるべく先も自得のおもしろさあるべし
此三此辨ハ荘子ガ意地ナカラ全ク俳諧ノ筆法ナリ去来西

喩ヨリ自得ノ趣意ヲ合成見立ノ篇中ニ十二篇ノ面白ヲ用イナ
春秋ノ間ニ二箇ノ面白ヲ思ヒ文ニ互照ノ法アリトスルハ然レ共ニ
四季ノ詞ヲ重テ前ニハ四季ノ姿ヲ云イ後ニハ四季ノ情ヲ云ヘル
此筆ハ文ノ一体ト見ルヘシ譬ヘハ龍宮ノ割札ハ俳諧ノ人ノ常話
ナカラ此篇ノ間ノ奇絶ト称スヘシ但シ作者ハ雑ノ新深ニ任ス
北村氏ノ風人ニシテ先師モ此篇ヲ称合セリ

梅巨者辨

井上重平

謙卑にして梅をもちひてさてハ大陸に梅を植て梅を愛し
梅のなをとなりあて、西行とも顧みへおよばずしくれの年

た一女もあり此人のうたよりて家よりは花の枝
と折てるて世界の撰ばれのまれるとやらにてやそ
ぬるとて詠りるいふやうなり秋と男よりて隠れと
るんう但を梅と書てもそれとるんうしらぶ梅の
咲ける一枝て結文
ある夕の井よりて出一を洒たる車井ある今」を
探り初瀬とおろ一のそいてあるふ井筒れ水仰
ま月とさて〳〵云ふうきのあらぬ一ふのあるさ
ふ蓮とそなりて詠よ事をて〳〵よ心いのりて蓮のも
かりさ折をこなそをつみねの畑ふ落よりのけて

あれかの有宗う男兄ふもろ〳〵ふたこうふの表の事
稽古の伝やうをあるあを主て宗うに離もあるよ本発も
かるあ一ろとて帝中よ国とあをてまて冷ふを人
のえよそんとかくをけ作のちくしとをて陽ふや
るんもろやあ〳〵けらふの梅の咲けるを一
孔云此辞ハ亜証ナルニ似テ家居ヲ辞スルニ師ラサル所アリ
増シテ荘年ノ分別ナラハ隠長ノ向ニ心ヲ筐テ昔ノ家ノ
神慮ニ任セントハ誠ニ虚空ノ自在ナルカ去ハ和靖カ体
ヨリ漢ニハ孝叔カ愛蓮ヨリ云イ降ニハ有宗カ数樹ヲ云ル

備聞ノ二字ハ首尾ノ文法ニテ文章ヲ試ツ二句ヲ用ユト
云ヘシ但シ作者ハ濃ノ支考草ニ蓮ス姓ハ井上ニノ梅長ハ東華坊

巴子ニ與フ杖ノ辨　東華坊

桃杖は越ねの高田なりし北本氏の人にて年よみさて
耳よ病ねのちりくを比へしよ年かくいけんと云ぞられ
あさて越の名ねと寛よそむけりといけ国よいける
ありて風雅の人さし徳うねは也れも枝らぢとさほど
て北も一万里の人よそもなひ月雪をもの心ゆるも一日
も忘るるんやありけよ桃杖は誰きをすしのことまて

夏の福光川のちとりをむかへの南風のねぶりに龍
とび化しぬると云ふこそへしらて桃杖の世さいとしやらり
夏より暖の時よはじく春寒の時よ縮しとかくあり
寒くの色とすしへてこれをはよきとやうの桃
をし行しよ私と行ちそいそかりも得よ摩りけと
このまさて耳よ病ねとはとあくりて子にとしと
桃杖よみてうけして其ちもの名をとすへしその一節
のあふよあらんとふまはりよ桃杖のはくへくとまての
名ぬとそしぬしとまて。

往云桃辨ハ此体ニテ杜甫カ桃杖ノ意ヲ含ムモモ文章ノ

寛延ナリ狭山ハ林ノ一ツ
化龍ハ勝貫長房カ仙術ヲ云ヘルナリ寒ノ魚トハ第
實ヲ竹ナリ去ハ巳ニ
名ヲ知ラルニ其ハ先所ノ古門人ニシテ北越ニ
トソ彼カ山雫集ニ第三モ見ヘタリ

招魂雑

人ノ魂ニあり其一ヲ昭々霊ニシテ鏡ノ
ちくふふくく其ヲもてゝ雲ヲもふ
其ニそ名利の向ふ

推左角

あるふくて世ニとゝ左ニ
いう色ちゝに二ヒの放
ゝそやもり何のふ
今そりにまふくふふ
名利のゆくへとあるを
扨ゝ宝門牝とゝ都
何ゝて其ゝの魂とゝ
ゝむゝ御ゝゝ用連
雑吉とゝゝて其ゝ魂の
一ゝ引ゝりて今ゝ

説類

塾上人説

塾の跡なるものあるをひらくにあらくそあれ

東山長咲

すり誠に性ノ昭々たる物ノ善悪ニアメヨフ之ニ臣ノ之所ニ隨ヒ
孟子モ説残セル所ニヲ卿諸ノ家ノ筆ヨリ殊ニ学問ノ名臣
ハ其ヨリ商物ノ詞ヨリ出テ不敬ノ名臣ヲン五ハ類ノ貴陽
ト起向ニ貴君ノ隠ニ所ヲ云イ重陽大君ハ結語類ノ招
ノ字ヲ云ヘル述ノ文章ノ互照ヲ知テ博達向在ノ文旅ヒ

武陵の春よ(と)おもふ心のうちの霞の中にうぐひすの声

あるかのなきかのほどにうぐひすの声をかすかにきくは

まれに聞長閑なる歳のあるにても劉玄石之酔のさめて風気そよ(と)吹たる

但云此雑ハ字本主ヲ題ヲ借テ其詞ハ虚誕ナル二似タレト儒仏ノ

言語文字ヨリ人界ノ今別理ヲ離レテ自己ヲ求ル二意ヲ情

名ぶ詰主ニ詫

應浪化

寝のまんまくふて、但を満足の二字よりも外の福と称をいふんをそと満足をもつ(一)

但此説ハ満足ノ二字ヲ以テ小栄主ノ名トナセル丈ハ満足ト

評カケテ二解有カ説ノ体ヨリ一篇ニつまノ評ヲ用ルニ

文章ノ意地ハ各別ニノ此筆ヲ撫骨ノ住トスベン誠ニ鉛刀ノ喩ヨリ

但ニカ様ノ朝ニ暮ヲ云ヘ居ル内ハ利鈍ヲ云ル竹田ハ例説ノ

筆格ナリ但シ此ニ越ノ瑞泉ニ住テ應山人ハ標号ナリトフ

櫻商人説

才今中

年をえ禄の幸ニそふんん事西和話の遣場(一)秋郷ノ高

ありそと悔こてをそ北華坊のえとかんて安宅(アタカ)の関と称ん事共に詞(一)

勧進帳の詞とをそ書風ハ雅くうて

・此字中そふあのこそ

篤ノ忠ニあそこまて西和話却

そうれそんなのこそ

称心称のえとかんて称商人の止れおそと

そも称そふ中そひまとそれ

おも称そふ中そひまとそれ

の高本歴まをそれ役(ニ)の行者

之頓中ヨリ行李ノ降ラザル件ニ
ツキ面ヲ伸ベテ商人ノ賄ヲ求ムル
ニ表根ノ五兎井ニ海陸ノ賄アリ
旅ヲ慰ムルノ人モ亦ソコニ会ス
ル商人ヲ呼ビ寄セテ客人ノ
饗応ヲ命ズ
縁アレバコソ此宿ノ謎トモ
モ一ツ此宿ノ謎トカモ
犯云此説ハ説ノ的面ニシテ歪註ニ人ヲ論破スト云ヒシハ
五兎井ノ繕餞別トハ先師北國ノ肯定ニ許ス事ノ種様

野宿山橋ノ旅寝ヲ繕ヒキ一軸ノ巻物トナセル探ル伏トハ
其ヲ題ヲ取リ為ス此題ノ名ニ寄セテ行名ヲ顕
ス例格ヲ顕ハシ次ノ一ニ説体ヲ尽セル誠ニ文章ノ
桟鋒ヲ得テ北陸ニ独歩有リト称スベシ但シ真蹟未ダ
ニシテ北苑坊ハ其ノ選ノ段名トノ

名説

度朝北

芳ヒラク武士ニ丸ノ名アリ今ニアルヲ
下ニヨセアルヲ以テ東華坊トイヒ西華坊ト
ヨベル華ヲ去ヒテ実ヲ考ヘ名ヲ正ス説ノ如シ

遍照僧正ニ与フル書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

論ずる處意ラ尽セリ誠ニ西多理屈ヲ離レテ能ク通理ニ遊フ十八童子ノ心傳心ニシテ史記ノ滑稽モ此話ニ看破スレバ孔子ハ此話ニ尿瓶ヲ洗テ理屈ハ如何ン通理ハ如何ン物ニ通理ノ無ラン哉ト讀者ハ今ニ往返スベシ全ク佛語ノ闇鍵ナリ但シ招邑ハ佛ノ名數ニ違ヒテ露堂ナリ嘯男

夜話說

右園秀吉公あるおのれお話ニ天下ニおゐてハ
りめら位ハあるやと申されおのれお話ニ
きねもありとまうしめくとかうと申ニ
ふれかも氣をつけよのらりくらりと
仕られねバなりしまうしあれく上おゐ而已ニ
上おゐとおゐやうとおゐあるとおゐ
ちふらりいうまでおゐ

和云此夜話ハ或ハ人ノ傳ヘヲ筆ニ誌ノ一ナラン加之六

太閤ノ一向ハ天下ニ我一人ナラデハ人ノ恐ルヘキ者ナレド諸人ニ云ハスヘキ釣語ナルヲ軽薄ノ侫臣トモノ案ニ落タルハ口惜シ去レド曽呂利カ答語ニテ一座ノ心ヲ轉換セル伴ハ永ニ向若ノ洛法ト云ヘシ誠ニ史記ノ滑稽傳ニ東方朔枚皐ナト武帝ニ答ヘタル俳諧ニシテ宜ニ俳諧ノ道ヲ論セハ国君ヲ恐ルニハ世界ノ理屈ニシテ国君ヲ心安シトハ俳諧ノ道理なり總テハ俳諧ノミナラス文鑑一部ノ道理トテモ此筆ノ風雅ヲ味フヘシ

辻談義ノ説

露五郎兵衛

はらく阿彌陀様を考みるに如来ハ五劫の間思惟ぶされ上ニ一人より下の賤女と姥とまて悉くをすくひたまんとの御誓願ハとりしや御本尊あんおかさをうるさてすかるも故ニ阿弥陀如来ハ座ろふようはてとまて阿く又衆のふるもかくす方四あらう西ニ方もとなきの方へ伸あらて諸人の地獄とはくるをえんてんをあくとつうりうんよしはれらい持国多門有いうり一騎當千の四天王又鎮守られ比獄と所はせふみたふいし高座とをてやまれハ芝居一ぶよで勧して歳をかりのらてあうりまり

犯云批ニ首ハ東洛ニ名ヲ知レテ洛陽ノ仏堂条札ニ彼者又居

ヲ張サルヲ以テ世ニ云フ辻噺ノ元祖ナリト雖モ祖翁ハ然ラズ露ノ五ツ六ツ新右ノ捌アラント雖モ曽呂利ノ落語ノ読ハ俳諧ノ余風ヲ頼ミシ体ニシテ其ノ二十一箇ハ皿ニ盛ル如クト祖翁ノ語ニ符ヲ合セ其ノ九ツ迄ハ残リテ右今ノ文言ノ引ニ入ラヌ処ニテ三箇ノ語ニ力ラ一死ニ至ラヌ心徳ナルヘシ

蕎麦切頌　二ノ字

むつと云ふまでのひの解たらてそれそれのえひ
もち茶そこそこひやのむも好ミ色そうほ

任云此頌ハ此体ナリ云ルハ文武ノ両道ヲ云ナラン風雅ノ剛柔ニ
比セルナラン然ルニ此作者ハ花鳥ヲ賞シ草木ヲ集ルト云ヘル集ニ叢書ヲ
花ノ解ヲ作リ其ノ全ニ此頌ヲナシテ以テ一事ヲ兼ルト云フ是リ
岡ツニ文武道ノ趣ヲ含ナセリ或ハ西行ノ萬葉ノ事ヲ此ノ儒
ノ和歌ノ詠ハナルヲ云ヘテ鴨長明ノ撰ビシ説ナリ或ハ筆ノ
末ハ五年ノ想ナカラ筆頭ノ事訓ハ名言ニメ源氏ニ
梵綱ハ和漢ノ奇對ナラン或ハ陸機ナカ臣頌ニモ文武ノ二
事ヲ云ヘルヨリ賞ニモ萬葉ヲ花鳥ヨリ移ス此等ヲ托物
比興トスイテ盡實ノ文銘ニ看ルベキナリ但シ作者ハ
武門ノ名ヲ隱メ濃州ニ山陰ニ書者道ス二行ハ此文ノ書ヲ
ト

不懲亦頌

木林百丸

逢えはて居士の嚴鬚杓瓢斯盃ちはの熟とつり
すのやよ對するのへふらし尾尾の分ようしりくれ
ろくまねち心とまてへてふかろう翁の二月圍まく
まるらんいくはくの月とうきのちいくはくのひと帰よ
ちなめへれるらひ美あるもや叶らし酒の徒へ丈人先生
の頌とありて庵山の森の讃はくそらひくく詩國
此風流とみて帰く損益のあくあるて其うつ心れともちく

三ヒさこ亦ノ名ニ附ク仏ノ如ク亜ニ其ノ影ヲ
移シテ又亜ノ死活モ物ノ名ノ好悪モ忘筆ノ又錯ニ入ル
ト云ノ意ヲ以テ一篇ノ故ト云又古語ニよる面ニ漸ノ事ヌヘシ事ニ
解スルニ足ラス

醋をむし　誰うたてそれと松ふくもあんし
ふるもの　ものうそ　の同じ　その

醋　スイ
醋　徳魂

嘉九卿

短句モ意外ノ者ト隠見ノ法ニシテ趣ヲ紀行ノ文ニ移スニヘヲ女トモ見ツ男トモ見ツ男カトハ云ヘレ見損シタルホモ一ツ侘ノ有尾ニシテ尾モ一ツ侘ノ名ヲトムヘレ但シ作者ハ越ノ糸魚川ニ住ス高野氏ノ俳士ナリ

松苔耳碩

世ニ宝ノ有ルヲ知テ有ルヲ知ラヌ事ト称ス梅桜ヲ其ノ時ヲ待テ賞スルヒトモ有ルヲ知テ賞セヌヒトモ有レ共ニ称ス其ノ物ニ有ルヲ知ラヌ人ノ性ヲ云ヘリ

河雪二流

物ヲ言ヒアヘヌ者ヲ唖ト云ヒ本ヨリ小ニ欠ケ口ヒ北ヲ欠ケルヲ以テ唖トスルヒトモ有ルヲ知テ保ニ有ルヲ知ラヌ人ノ性ヲ云ヘリ

いふある程とかもてやうらを浮世の境界とおもふ

それそのそを同のものそ神宮のおよくもあらぬ

その名を雪のしらくれと久米仙人の脛とそふそれ

かくむくつけれを天の生質ある一ト句ノ詮

のさかふりてそゆきの汁のさゆる世はあてこれ汁の
みこれる世こそおもしろけれ日のくれかゝるに雪の
とてふりて雪の哀えの徳應もそのまゝの飯と
酔をあらそふそとなりてこゝにあるハ
風閑のよそをなすかこゝにあるハ魚町の八百屋
森うらくへ今を西鳴のおもしろきあるハ東雁の改童
もまゝうりてゆくもあるハ柚子をもちいてをあるも
もあり又ハ雁ハ渕体ヤウの始へ美人の毫屐ニ寄セテ清閑
行云々頌ハ渕体ヤウの終ハ聖人ノ行藏ニ喩フ兄ヤ
ノニなニ轉捲ヲセシヨリ

章末ノ花實ヨリ花實ニ同雅ノ一様ヲ起シテ振ノ花
實ニ染情ヲ結シタル流筆ヲ首尾ノ文法ニシテ常ノ
虹ノ働アリトミヘシ去ハ和漢ノ章紙ト候ニ末州箱
譜ヲ云イ傳ニ徒然ノ鯉ノ段ヲ云ヘルハ小云秋カ露モ秋同
モ桜櫻ノ二詞ト云モニ絶ナル句對ノ中ノ絶妙ニシテ論詰ノ蕾ハ好對ト云ヒ花實ノ
ハ置合ナリト見テ清閑ノ詞ノ續キヲ称スヘシ諏訪名所圖
ナル岩窓針菅ノカタミモナク紅葉ト治ノヌメリまヽヲ見ル
松菅ノ名ヲ頌シテ花實ノ當用ヲ知ヒナリ但シ作者ハ
越ノ新深ニ住ス吉川年ノ文士ナリ